

マネートップ
ニューストップ
最新ニュース
記事全文

2010年11月17日

最新オランダのアート&デザインのエッセンスが凝縮

Business
People
誠



「小さな東京モニュメント」2万
1000個のブロック、セメントに
よるインスタレーション

2010年初めてデザインタイトーキョーのエクステンション会場と参加したのが、東のアート発信地、東京都現代美術館。10月29日から開催中の「オランダのアート&デザイン新言語」では、開催にあたって参加デザイナーが3名来日した。

1990年代から、前衛的なアプローチで注目を集め続けるオランダのデザイナーたち。今回はそのデザインの分野から2人、そして、アートの分野から2人、合計4人のクリエイターが選ばれた。デザインの分野からは、歴代最年少31歳で、デザインマイアミ2009のデザイナーオブザイヤーを受賞したプロダクトデザイナーのマーティン・バース氏と、コンセプチュアルなオランダコンテンポラリージュエリーの第一人者、テッド・ノーテン氏。

一方、アート分野からはユーモアとウィットに富んだ体験型のアートを展開するマルティン・エンゲルブレクト氏と、大阪生まれで現在オランダを活動拠点とするパフォーマンスアーティスト、タケトモコ氏。アートとデザインという異なる分野のものを一堂に集めることで、オランダという国が持つ豊かな文化の土壌を感じることができる企画となっている。

まず紹介したいのは、マーティン・バース氏の作品だ。会場では、2002年にデザインアカデミーアイントホーフェンの卒業制作「Smoke」シリーズから、今年発表された「アナログ・デジタル・クロック」まで、彼のこれまでの作品を一度に観ることができる。

彼の出世作となった「Smoke」シリーズは、オークションで手に入れた既存のバロック様式の家具やイケアの家具などを燃やして、エポキシ樹脂でコーティングした、非常に斬新なもの。人々が家具自体に求める「美しさ」をあえて燃やすことによって、いったん無に帰し、それを再びよみがえらせることによって見えてくるものを提示した、センセーショナルなシリーズだ。

さらにその2年後には、イームズやソットサス、カンパナ・ブラザースといった巨匠たちの家具をクライアントの要望により同じ方法で燃やしているが、今回はその中から、ヘリット・トーマス・リートフェルト氏のジグザグチェアが展示されている。

一方、マーティン・バース氏を語る上で欠かせないのが、時計を題材とした一連の「Real Time」シリーズだ。iPhoneアプリまで登場しているこのシリーズの根底に流れるのは、刻一刻と過ぎゆく時間を紡いでいるのは、小さな営みを重ねる人間自身だということ。とても詩的なシリーズ、じっくりと時の流れを感じながら、その動きを見てほしい。

過激さ、その一方で繊細さとユーモアを感じさせるマーティン・バース氏の数々の作品。彼の発想の源はどんなところにあるのだろうか？ 来日したバー

ス氏に聞いた。

——着想がとてもユニークで、さらにそれを思いがけないやり方で実現していると思います。発想はどこから生まれるのでしょうか？

普通のデザイナーはテクニック、素材、機能といったところからデザインを始めると思うのですが、自分の場合はあらゆるところから着想を得て、デザインをしていきます。どうやらほかのデザイナーとはアプローチが違うようですが、決してわざとやっていることではないんですよ。わたしの場合は、こういうやり方でしかできないんです。(ほかのデザイナーが行う)コンピュータでデザインをして、そこから作るという方法をやったことがないですし、やり方も知らないのです。わたしの場合は、まず手で何かを作ってみて、考えていきます。わたしにとっては、これが論理的な方法なのです。だれかを挑発しようと思って手がけていることでもないですし、いえることは「これがわたしなんだ」ということ。作りたいものを作っているということです。

——現在進行中のプロジェクトについて、教えてください。

アイントホーフェンの市民ホール向けのインスタレーションを現在作っています。目下、作業中ではあるのですが、とても小さな家があって、その上に「グラウンドファーザー・クロック」が設置される予定です。高さは5メートルほど。イメージとしては、その小さな家に人が住んでいて、その人が時計を動かしているような感じですね。

——それは楽しみです！

それから、12月にリニューアルオープンする、オランダのグローニンゲンミュージアムのレストランも手がけています。テーブルや椅子もすべて「クレイ・ファニチャー」を入れる予定で、現在、実用化に向けて最終的な詰めを行っているところです。パブリックスペースでクレイ・ファニチャーを使うことは初めての試みなので、新しい技術を開発して、新たなものを作っています。これまで

のクレイ・ファニチャーは展示用として、上から着色を施したものになるのですが、今回はクレイ自体に顔料を混ぜて作っています。このクレイは、簡単に色が変わえられる便利な素材。そのため、あえて少し微妙に色の差が出るように作っています。

——それでは、いまいちばん作りたいと思っているものは何でしょうか。

わたしは甘やかされたデザイナーで、自分が作りたいものを作れる、非常に恵まれた環境にいます。レストランを作りたいなと思っていたら、もうすぐ実現してしまいますし……。夢より現実が先に行っている感じなのです。現実のスピードの方が早い。

——日本の企業とコラボレーションする予定はありませんか？

特にいまはないですけども……。もちろん僕自身はオープンな状態ではあるのですが。

——では、何かオファーがあればやる可能性があるということでしょうか。

日本のハイテクな大量生産のプロダクトについてオファーが来たら面白いとは思いますが、でも、日本ではミニマムなデザインが好まれるから、私のようなデザイナーが呼ばれることはないんじゃないかと思いますが……。

——今回の展覧会は、オランダのアートとデザインを同時に取り上げる画期的な展覧会だと思います。アートとデザインについて、どのような違いを感じられますか。

わたし自身は、アートとデザインの境界線を取り払いたいとつねづね思っています。そういったボーダーを取り払った斬新な試みとして、今回の展覧会には非常に意義深いものを感じています。

来場者が体験し、参加していく形式の作品を複数展開しているのが、マルタ

イン・エンゲルブレクト氏だ。街なかで作品を展示する形で、人々が先入観なしに作品に対峙してくれることを心がけており、今回のように美術館の中で作品を展示するのは初めての試みだ。

今回の展示の真ん中にある「Rest」。巨大なピクニックテーブルと自動販売機を含むインスタレーションで、このテーブルに実際に登って、座って休憩できるようになっている。「Rest」というタイトルには、「レストラン」や「休息」といった意味と、「余り物」という意味合いが含まれている。残念ながら、今回の展示では食べ物を持ち込むことはできないが、オランダ国内での「Rest」展示は、オープンエアのレストランとして野外に設置され、実際に余り物だけで作った料理が提供された。収穫された作物の約35%が規格外などの理由で廃棄されてしまう現状に対しての、問題提起となっている作品なのだ。

今回の展示で持ち込まれた“料理”は、じゃがいもの自動販売機(下写真)。販売されているのは、すでに芽が出つつあるじゃがいもだ。これを土の中で育てることにより、3カ月後にじゃがいもが食べることができるという「究極のスローフード」だと、エンゲルブレクト氏は語る。そこには、すぐ買って食べたり飲んだりできる「自動販売機」というものに対してのユーモアを交えた問題提起も含まれている。来日中のマルティン氏に詳しく話を聞いた。

——作品はすべて参加型で、とてもユニークですね。

ありがとうございます。ただ観るだけではなく、さわったり、どこに入るかを選んだりすることが重要な作品なんです。

——中でも「ご近所ショップ」にはちょっと笑える不思議なアイテムがたくさん売っていて、面白かったです。「ご近所同士のコミュニケーション」と題したアイテムが、ひもと小さなバケツをセットにしたものだったり、ご近所さんの「涙をふいてあげるためのハンカチ」が150円で売られてたり。

笑うことは新しく絆を作ることで、とても重要なことだと思っています。ユーモ

アは人々をオープンにさせるということで、大事なことなんですよ。

——今回の展示のあちこちに「Please Touch」と書かれた表示があります。これは「Please don't Touch」というお決まりの表示に、ある種の冷たさを感じて「Please Touch」としているように感じました。日本には「言霊」という考え方もありますが、マルタインさんは言葉に含まれるパワーを信じているのでしょうか。

はい。わたしも言葉や文字にエネルギー、パワーがあると感じていますし、同時に、つねに言葉というものは始まりだということを感じています。わたしは、最初はグラフィックデザインをやっていました。今回の展示にもありますが、YES・NOのチャート式のアンケートを作っていたんです。しかし、紙を見るだけじゃなくて「外に目を向ける」ことを人々にしてもらいたいと思うようになりました。そこで、街なかにお店を突然出現させるプロジェクトを始めるようになりました。人と人とのつながりが、どんどん広がっていくことをイメージしたプロジェクトです。

——日本で同じようなことをすると、警察が来て注意されてしまうでしょう。オランダではいかがですか？

ときどきそういうことがありますよ(笑)。アートをやるには勇気が必要なんです。人々はあるルールに沿って生きているわけですが、ときにはそれを破る必要が出てくることもあると思います。以前、こんなことがありました。レンガを4万5000個用意して、みんなで1つのモニュメントを作るというプロジェクトで、実際にその街のそれぞれのお宅にきれいに紙に包んだレンガを渡しに行きました。1万個配ったところで、市長さんに怒られてしまったんですね。渡したレンガがモニュメントを作るのではなく、窓に投げ込んだり危険なことに使われては困ると。今回の展示では、とても小さなレンガ(ブロック)を2万1000個、用意しています。これをみなさんの手で積み上げることによって、「東京モニュメン

ト」を作ろうとしています。

コンセプチュアルなオランダのコンテンポラリージュエリーの第一人者がテッド・ノーテン氏。強烈なウィットに富んだ彼の作品は、ひと目で分かる面白さと同時に、優雅な美しさも兼ね備えている。ありふれたものや洗練されたものの中に存在する普遍的な意味を見つけ出し、その本質をつまびらかにする作品の数々は、とても刺激的だ。

例えば、銃をアクリルに閉じ込めた美しい作品。これは実際に街行く人々に銃を持っているかを尋ね、持っていればそれを買取り、分解して使えなくしてから、アクリルに閉じ込めるという手の込んだ作品だ。「人々から銃を買取る」という行為から、その作品制作は始まっている。

この不思議な形のティアラは、ウィレム・アレクサンデル皇太子の婚礼に際して、スヘルトヘンボス市立美術館が新しい皇太子妃のためのティアラをコンテンポラリージュエリーとして提案しようとするコンペティション形式の展覧会に出されたもの。ノーテン氏は、自分たちの新しい皇太子妃がイギリスのダイアナ元皇太子妃のように交通事故で亡くならないように、ヘルメット型のティアラを制作したのだ。同展に招かれたオランダを代表するジュエリーデザイナー21人の中でも彼の着想は際立っており、グランプリとして評価された。

今回の展示で、来場者の人気をいちばん集めていたのが、指輪を交換するという参加型のプロジェクト「Wanna swap your ring?(あなたの指輪と換えてみない?)」だ。

今回初めて実施されたこのプロジェクトは、3Dプリンタで作られたガラス繊維入りナイロン製の指輪と、来場者の指輪を交換するというもの。来場者から集めた指輪は、それを基にまた新しい作品に生まれ変わらせるという。ノーテン氏は風景が変わることを「歴史が変わること」になぞらえている(すでにすべて

の指輪が交換されてしまったため、現在は差し変わった風景が観賞できる)。

大阪生まれで、現在オランダのアムステルダムを活動拠点とするパフォーマンスアーティスト、タケトモコ氏。京都市立芸術大学大学院を卒業後、1997年にオランダのライクスアカデミーでのレジデンスを足がかりにアムステルダムでの活動を始めた彼女。今回、彼女はオランダのアーティストとして招聘されている。

彼女は自分の「Home」を日本ともオランダとも決められないあやふやさを「Homeless」という言葉に託し、進んで「Homeless」の状態にある人々の交流をはかるうちに、彼らの行動や考え方に興味を持ったという。そして、ホームレスの人々と直接関わろうとしない普通の人々と彼らを積極的に交流させるプロジェクト「Piece of Home / HomelessHome」を2003年からスタートすることになる。

アムステルダムをはじめとする、さまざまなパブリックスペースで展開されるこのプロジェクトは、シンボリックな直径16メートルの大きな白いテントを中心に、オリジナルのオーガニックカフェやワークショップスペースを設け、訪れた人々は自由に参加することができるというもの。カフェでは手作りのオーガニックな食べ物や飲み物を食べながら、ホームレスと一般の人々が自然にコミュニケーションできるように配慮されている。ワークショップでは、アーティスト自身がデザインしたオリジナルのパターンから、参加者自身が自由なかたちに取り取り、ペイントを施したりして、カスタムメイドの衣服を制作できる。

今回の展示では、そのワークショップの風景や、実際に出来上がった衣服を観ることができる。ちなみに、ワークショップ終了後にはファッションショーを行われ、ワークショップの参加者全員がそれぞれ制作した服を身にまとい、オリジナルの曲にあわせてキャットウォークを歩いた。制作した衣服は、ワークショップの参加者が各自持ち帰ることができる。社会的通念を越えて、人々との関わりを積極的に推進していこうとするタケ氏のハッピーなプロジェクト

は、シンプルだが、強いメッセージを放っている。

自由な発想に満ちた、オランダのデザインとアート。それらは凝り固まった固定概念をくるりと覆すパワーを秘めている。本展はクリエイティブ・コモンズに沿った写真撮影が可能なため、ブログや写真共有サービスへの投稿も可能。来年1月30日まで。【草野恵子, エキサイトイズム】

●オランダのアート&デザイン新言語

東京都現代美術館 東京都江東区三好4-1-1

開催中～2011年1月30日(日)

休館日:月曜日(1月3日、10日は開館)、12月29日～1月1日、1月11日

お問い合わせ:03-5245-4111

Copyright (C) 1997-2010 Excite Japan Co.,Ltd. All Rights Reserved.